代表:文学研究科D2　福井優

2020年度日本思想史研究会

日本思想史における「民衆」論再考

研究課題

・日本思想史において「民衆」は、知識人によっていかに語られてきたか、表象されてきたかを、近代以前にさかのぼって総体的に考察する

・安丸良夫「「民衆」や「大衆」は、実体的というよりも方法的概念であり、研究者が対象としている社会や歴史についてあるまとまったイメージを描くさいに不可欠な構想力にかかわる概念」

運営方法

・Zoomによるオンライン研究会。今年度は18回開催した

・メンバー各自の研究領域や専門の時代の中で「民衆」がどのように論じられてきたかをまとめ、自身の研究課題を踏まえ報告を行う

主な研究内容

1、古文英「山田方谷の君主像と庶民観」

近世前期以来、「明君」「賢君」の言行が社会的に意識化され、「明君」は常に「徳」の顕示、人心の統合と教化などと表裏一体の関係として論じられてきた。本報告では、こうした近世日本思想史における「明君」像の展開を踏まえた上で、山田方谷の撫育政策、借財整理、獄政改革などを考察することにより、その君主像と庶民観を捉え直した

2、渡勇輝「「柳田ブーム」と「国家神道」論――1970年代の動向をめぐって」

柳田国男の提示した「固有信仰」論は、民族的宗教としての「神道」概念を強固にして、戦後日本において「国家神道」に代わる機能をもったとされている。柳田の言説が戦後神道に影響力をもったことは間違いないが、この問題をさらに進めるためには、柳田のテキスト分析とともに、柳田がいかに再発見されてきたのかという同時代的な文脈にも注意する必要がある。本報告では、近年、村上重良の「国家神道」論が1970年代の時代状況のなかから読みなおされるにあたって、「柳田ブーム」と呼ばれる現象が同時代にあらわれてきたことに注目した。その基礎的作業として、『季刊柳田國男研究』をはじめ、柳田評価の潮流を思想史的に確認し、村上の宗教発展説とは異なる文脈から起こっていたこと、また両者の潮流はともに戦後歴史学の方法的立場と密接に関係していることを確認した。

3、平石知久「丸山眞男の「民」観の変遷――変革の主体は「市民」か「大衆」か」

戦後民主主義の理論的旗手であった丸山眞男は、その民主主義論の担い手として、西洋近代的な合理化された「市民」を想定していたと一般的に解されている。本報告では、丸山が変革の主体として期待した「市民」と「大衆」それぞれに注目し、丸山の人々に対する認識の諸相を明らかにした。

4、王小梅「戦後日本における吉本隆明の大衆論の射程と市民民主主義」

本報告は、批評家・詩人の吉本隆明の自立・大衆思想と同時代の市民思想との交錯に焦点をあて、ラディカリズムを中心的特徴とする新左翼と吉本との関連性や、吉本による大衆論の変遷を探り、その政治思想の位置づけを検討した。1960年代の吉本と市民主義派知識人との交流の中から、吉本の自立論と大衆論に見受けられる変遷を確認した上で、その射程を新たに見定めることを試みた。

5、福井優「丸山学派と「民衆」――神島二郎と藤田省三を中心に」

「丸山学派」の代表的な政治学者である、神島二郎と藤田省三は、1950 年代後半に師の丸山の影響を受けた「日本ファシズム」研究によって論壇に登場した。両者はその研究によって、「日本ファシズム」の基層に前近代的な村落の共同性があることを指摘したが、一方で、むしろその部落共同体のパーソナルな人間結合に、国家への「抵抗」の契機を見出す。

総括と今後の課題

・「民衆」は知識人の思想的営為の基底をなす「方法的概念」。近世～戦後の代表的知識人の「民衆」論をたどることができた

・特に丸山と吉本は、先行研究ではその「民衆」像の対立点が強調されるが、大衆の私性、非合理性を変革可能性へと結び付けようと思想的に格闘した点において、共通する側面がある

→「民衆」論を軸に、同時代における思想史・歴史学・民俗学・宗教学等の学知の影響関係を明らかにする必要がある